



TITLE:

<書評リプライ>三津島一樹氏の書  
評への応答

AUTHOR(S):

浜田, 明範

---

CITATION:

浜田, 明範. <書評リプライ>三津島一樹氏の書評への応答. コンタクト・  
ゾーン 2018, 10(2018): 406-408

ISSUE DATE:

2018-06-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/232982>

RIGHT:

## 三津島一樹氏の書評への応答

浜田明範

はじめに、拙著に対する丁寧な読解に基づいて書評を作成していただいたことに対して、三津島一樹氏にお礼を述べさせていただきたい。本当にありがとうございました。

今回発表された書評において、三津島氏から指摘されたのは、私の理解では大きく二点である。まず、三津島氏は、「ガーナの特異な医療制度」と「当該社会における個別具体的な医療実践」という二つのレベルのあいだの関係性についての検討が不足していると指摘している。次に、三津島氏は、前者（国家レベル）が後者に対してもつ権力関係についての分析が本書でなされていないと指摘している。

これらの指摘は、いずれも本書に不足があることを的確に示すものである。また、本書の中では、それらについて議論していない理由についても必ずしも明快な形では述べられてはいない（のだと思う）。そのため、三津島氏の指摘はいずれも的を射たものであることについて、私はここで争うつもりはない。とはいえ、ここでせっかく何がしかの文章を書く機会を頂いたので、本書が出版された後に考えてきたことを踏まえて、今ならどのように考えるかについて述べることで、応答とすることにした。

三津島氏が提示された二つの論点は、私の理解では、いずれも、領域媒介的な権力論をどのように構想するかという点に関わっている。

私は、「ある特定の状況における人やモノのあいだに」、優劣はともかくとして「強弱」があることについては否定しない。重要なのは、その強弱がどのような形で現れるか、あるいは、私たちはどのようにしてそのような強弱があることを理解することができるのかである。この際、本書で展開された布置論を発展させた論文で議論したのは、グローバルレベルや国家レベルのアクターの強さは、それがより大規模に、かつ、より標準化された形で、より人々の行為に影響を与えうる人やモノを配置できる点にあるという発想だった〔浜田 2015〕。三津島氏が指摘するように「人とモノの布置の効果」は「人々をある一定の方向に導く」だろうし、その際、特定の状況においては、（つまり必ずしも常にというわけではないのだろうが）何らかの政策的な意図が実現されることも当然あるだろう。そのこと自体を否定するつもりはない。

繰り返しになるが、ここで重要なのはどのようなプロセスで人間の行為や態度が一定の（なおかつ単一ではない）方向に導かれるのかである。私がミシェル・フーコーの統治論を援用しながら展開してきたのは、国家や製薬会社は何か神秘的な力を持っているのでは

なく、多くの人々が行っているような、人やモノを配置する実践を通して人々に影響を及ぼしているのだということである。換言するならば、私は、＜より強大な力をもった国家やグローバル企業＞と＜ローカルで暮らす人々の実践＞の二項の対立図式ではなく、両者が同一の領域で布置をいじりあうという領域媒介的な権力論を構想している。

私は本書の中で、三津島氏が正しく指摘するように、国家レベルと具体的な実践のレベルの二つのレベルを設定し、両者の相互作用という枠組みで議論していない。しかし、国家やそれを超えるレベルで人やモノを配置するようなアクターもまた、人々が（病原体とともに）日常のレベルで行っている行為によって作り出された布置＝環境によって駆動される可能性については、他の所で議論しているのでそちらについても今一度確認いただければと思う〔浜田 2017〕。

ここで、三津島氏が多くの紙面を割いて指摘している取りまとめと分配の関係についても応答しておこう。まず、三津島氏が、私が複数のフラエの関係性についてきちんと取り上げて議論するのではなく、根拠を明示することなく複数のフラエの分配について書き捨てていると指摘していることは正当である。しかし、複数のフラエに関係がないことを明確に根拠づけて書くことは困難な（しかし重要な）課題である。民族誌的な方法に基づいて、関係の不在や切断についてどのように書くことができるのか。この点について、三津島氏も引用しているアネマリー・モルの本の別の章が、おそらく参考になる〔モル 2016: 131-170〕。私は、モルのように緻密にこの点について議論すべきであったし、対象の特性上それが難しかったとしても、やはりモルの議論を参照しておくべきだったと今は考えている。この点については、純粹に私の瑕疵であり、三津島氏が書評を書いてくれたおかげで、この点について誤りを認める機会を得られたことを嬉しく思う。

最後に、これも本書で明確に記されているわけではないので後付けの言い訳のようなものなのだが、三津島氏の書評に触発されてポストプルーラルという発想について少し考えてみたい。ここでいうポストプルーラルとは＜複数のものが必ずしも複数とは言えない＞状況のことである。すなわち、国家・制度レベルと人々の行為や実践レベルの相互行為を検討すべきだという三津島氏の主張についてである。先述のように、私はこの点について、二項の相互関係ではなく領域媒介的な権力論という形で検討しているのだが、それに加えて、三津島氏のいう二つのレベルを明確に分けることは本当に可能なのかという点についても検討してみたい。

三津島氏の主張は、私には、国家・制度レベルと行為・実践レベルがどのように相互作用してきたのか、その「実際の」〔ストラザーン 2015: 229〕経緯について検討すべきだというように読める。もちろん、この主張は正当なものであり、本来であれば、私は、横着せずに、この点について文字資料の収集や政策担当者へのインタビューを通じて緻密な歴史を描くべきだったのだろう。

他方で、本書で試みられたのはそれとは異なる手法で、両者の関係について議論することであった。ケミカルセラーという制度を設立し統制しようという国家・制度レベルの医療の特異性は、店番に任せて頻繁に畑に行ってしまうという実践について知った後では、まったく別用のものとして見えてくる。逆もまた然りで、ケミカルセラーの店主が頻繁に

畑に行くことは、ケミカルセラーがどのように制度化されているのを知る前と後ではまったく異なる意味を持つ。そうであるならば、制度について書くことは実践について書くことであり、実践について書くことは制度について書くことである。両者は、必ずしも別々の現象とは言えない。両者を別々のものとして想定したうえで、お互いがお互いを観察したうえで自らのふるまいを変えるような「実際の」経緯について書くのとは異なる方法で、制度と実践の絡まりあいについて描く方法はある。

今後、三津島氏の指摘に触発されながら、制度と実践をポストプルーラルな関係にあると想定したうえで人々の認識について書きながら、どのように「実際の」歴史が動いており、それがまた人々の認識をどのように変更させていくのかを検討できるような、より複雑なプロセスを描きうる記述の戦略を検討していきたいと思う。

#### <参考文献>

- 浜田明範 2015 「書き換えの干渉——文脈作成としての政策、適応、ミステリ」『一橋社会科学』第7巻（別冊） pp. 125-150。
- 浜田明範 2017 「魔法の弾丸から薬剤の配置へ——グローバルヘルスにおける薬剤とガーナ南部における化学的環境について」『文化人類学』81(4): 632-650。
- モル、アネマリー 2016 『多としての身体——医療実践における存在論』浜田明範・田口陽子訳、水声社。
- ストラザーン、マリリン 2015 『部分的つながり』大杉高司・浜田明範・田口陽子・丹羽充・里見龍樹訳、水声社。